

# はじめに

東日本大震災において、犠牲となった方々に哀悼の意を表すとともに、被災された皆さまに心からお見舞い申し上げます。

平成 23 年 3 月 11 日（金）午後 2 時 46 分、三陸沖を震源とする巨大地震が発生し、それに伴う大津波が東北地方の太平洋沿岸をのみこんでいきました。

東日本大震災における死者は、全国で 15,870 名、宮城県では 9,527 名で、大変多くの尊い命が奪われました。また、行方不明者も、全国で 2,814 名、宮城県では 1,394 名となっております（H24.9.19 現在）。

このうち県内の幼児、児童及び生徒については死者・行方不明者が 430 名、教職員も 22 名が犠牲になり、特に石巻市立大川小学校においては、避難途中で児童 74 名及び教職員 10 名が犠牲になりました。このように多数の幼児、児童、生徒及び教職員が今回の大震災で犠牲になったことについては、痛恨の極みであり、二度とこのような犠牲者を出さない防災教育及び防災体制の再構築に全力で取り組んでいくことが、私たちの責務であると考えております。

今回の東日本大震災の経験を踏まえ、地域の特色や各学校の特性に応じ、自校化した独自のマニュアルの作成や地域住民との連携による防災体制の強化など、従来の防災教育の在り方を見直していくことが必要であり、これを進めるために平成 24 年度から全ての公立学校に防災主任を配置し、地域の拠点となる小・中学校には防災担当主幹教諭を配置しました。

併せて、今回の厳しい教訓を後世に伝えるとともに、学校において計画的・継続的な安全教育を行い、幼児、児童及び生徒に安全意識の内面化を図るために新たな指針の策定が必要となったことから、災害安全はもとより交通安全、生活安全（防犯を含む）の三領域を網羅した本県独自の指針を「みやぎ学校安全基本指針」として策定しました。

本指針では、「危険を回避する力と他者や社会の安全に貢献できる心」を育てることをねらいとし、その目的を達成するために、学校で安全教育、安全管理及び組織的な活動にどのように取り組んで行かなければならないかを示しています。また、発達段階に応じて、幼児、児童及び生徒に必ず身に付けさせたい指導事項を明確にするとともに、学校安全計画の例示も盛りこんでおります。特に、防災教育については、今回の東日本大震災を踏まえ、これまでの想定を超えたあらゆる状況を捉え、震災発生時の対応について教職員の役割を明確化し、命を守るための各学校の防災体制の確立が図れるように取り組んでいます。

この指針を基にして、各学校が、地域の特性や学校の実態等に応じ、地域に根差した学校安全教育を進め、幼児、児童及び生徒一人一人が、自ら危険を予測し回避できるための力を身に付け、事件・事故・災害から自らを守るとともに、他者や社会の安全に貢献できる人となることを願うものであります。

平成 24 年 10 月

宮城県教育委員会  
教育長 高橋 仁

# みやぎ学校安全基本指針 目次

はじめに

永遠に語り伝えたい命のメッセージ	3
------------------	---

## 第1章 東日本大震災

I 東日本大震災の記録	
1 巨大地震の概要	13
2 被害概要	13
II 平成23年度東日本大震災における学校等の対応等に関する調査（宮城県分）結果概要	14
III 調査結果等からの課題と対策	19
IV 後世に伝えたい「8つ」の教訓	
1 防災に対する日頃の教職員の共通理解・共通実践！	20
2 これまでの避難訓練の見直し！	20
3 二次災害に対応した、避難場所（二次・三次）の設定・避難経路の確認！	21
4 状況に応じた安否確認マニュアルの設定！	21
5 保護者と引き渡しルールを事前に確認！	22
6 市町村部局と連携した、避難所運営マニュアルの整備及び避難所運営！	22
7 登下校中及び在宅時の避難対応の指導！	23
8 学校を中心とした専門家による心のケア！	23

## 第2章 学校安全

I 学校安全	
1 学校安全の法的な位置付け	27
2 学校安全の構成・構造	27
3 三段階の危機管理	28
4 学校安全の三領域	28
II 学校安全担当者	
1 防災主任・防災担当主幹教諭の配置と役割	29
2 学校安全担当教諭等の役割	31

## 第3章 安全教育・安全管理・組織活動

I 安全教育	35
1 安全教育の目標	35
2 発達段階における安全教育を通して身に付けさせたい力と心	36
3 必ず身に付けさせたい事項と内容	37
（1）災害安全	38
（2）交通安全	54
（3）生活安全（防犯を含む）	60
II 安全管理	68
1 学校環境の安全管理	68
2 安全管理の対象	69
3 三領域の安全管理	
（1）災害安全	70
（2）交通安全	72
（3）生活安全（防犯を含む）	73

Ⅲ 組織活動	78
1 校内の組織体制	78
2 教職員の共通理解と校内研修	78
3 家庭、PTAとの連携	79
4 地域社会や地域関係機関・団体との連携	79
5 地域学校安全委員会等の組織	81
<b>第4章 学校安全計画</b>	
Ⅰ 学校安全計画の策定	85
Ⅱ 学校安全計画の策定にあたって	85
Ⅲ 学校安全全体計画	86
Ⅳ 学校安全年間計画の内容例	87
<b>第5章 評価</b>	
Ⅰ 学校安全計画の評価・見直し	105
Ⅱ 安全教育の評価	105
Ⅲ 安全管理の評価	107
Ⅳ 組織活動の評価	109
<b>第6章 心のケア</b>	
Ⅰ 心のケアとは	113
1 事件・事故災害時における心のケアの意義	113
2 心のケアと学校の役割	113
3 事件・事故災害時における心のケアの基本的理解	114
4 事件・事故災害時における心のケアの留意点	118
5 組織的な対策	119
6 平常時の心の健康づくり	119
7 教職員の心の健康管理について	120
8 関係機関との連携	121
<b>第7章 学校防災マニュアル作成のポイント</b>	
Ⅰ 学校防災マニュアルとは	125
Ⅱ 三段階の危機管理	125
Ⅲ 作成のポイント	127
Ⅳ 『学校防災マニュアル』チェックリスト例	129
<b>資料</b>	
Ⅰ 学校安全に関する関係法令	133
Ⅱ 学校安全指導資料一覧	135
Ⅲ 心のケアに関する取組	136
Ⅳ 作成経過及び作成協議会委員	140
<b>別冊 学校防災マニュアル作成ガイド</b>	



# 永遠に語り伝えたい命のメッセージ



岩井崎の松（気仙沼市）



## 気仙沼市立階上中学校卒業式 卒業生代表の言葉

本日は未曾有の大災害の傷も癒えないさなか、私たちのために卒業式を挙げていただき、ありがとうございます。

ちょうど10日前の3月12日。春を思わせる暖かな日でした。

私たちは、そのキラキラ光る日差しの中を、希望に胸を膨らませ、通い慣れたこの学舎を、57名揃って巣立つはずでした。

前日の11日。一足早く渡された思い出のたくさん詰まったアルバムを開き、十数時間後の卒業式に思いを馳せた友もいたことでしょう。「東日本大震災」と名付けられる天変地異が起こるとも知らずに…。

階上中学校といえば「防災教育」といわれ、内外から高く評価され、十分な訓練もしていた私たちでした。しかし、自然の猛威の前には、人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切なものを容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というには、むごすぎるものでした。つらくて、悔しくてたまりません。

時計の針は2時46分を指したままです。でも時は確実に流れています。生かされた者として、顔を上げ、常に思いやりの心を持ち、強く、正しく、たくましく生きていかなければなりません。命の重さを知るには大きすぎる代償でした。しかし、苦境にあっても、天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていくことが、これからの私たちの使命です。

私たちは今、それぞれの新しい人生の一步を踏み出します。どこにいても、何をしようとも、この地で、仲間と共有した時を忘れず、宝物として生きていきます。

後輩の皆さん、階上中学校で過ごす「あたりまえ」に思える日々や友達が、いかに貴重なものかを考え、いとおしんで過ごしてください。先生方、親身のご指導、ありがとうございました。先生方が、いかに私たちを思っていたか、今になってよく分かります。地域の皆さん、これまで様々なご支援をいただき、ありがとうございました。これからもよろしく願いいたします。

お父さん、お母さん、家族の皆さん、これから私たちが歩いていく姿を見守っててください。必ず、よき社会人になります。

私は、この階上中学校の生徒でいられたことを誇りに思います。

最後に、本当に、本当に、ありがとうございました。



平成23年3月22日  
第64回卒業生代表

梶原 裕太

## 南三陸町立戸倉小学校卒業式 学校長式辞

あの寒かった夜、星を見上げながら歌をうたった日から、5か月あまりが過ぎました。はじめに卒業式を本日まで延期してまいりましたことを、皆様にお詫び申し上げます。

しかし、今日、この場で卒業生の皆さん全員と顔を合わせることができましたことは、この上の喜びであります。

さて、23名の卒業生の皆さん、卒業おめでとう。

私たちは、あの日地震と津波に襲われ、家や家財を流され、命さえも危険にさらされました。そして、「何もかも失ってしまった」という気持ちにおそわれました。

でも、私たちは本当に全てを無くしてしまったのでしょうか。

皆さんが調べた戸倉の美しい海や島、先生方とすごした教室、ライバルと競い合った陸上競技場…、全てが津波で消えてしまったのでしょうか。

小学校の生活をもう一度思い出してみましょう。

毎日、何回も繰り返しがんばって、できるようになった算数の計算、怒られながら、けんかしながら、確かめ合った仲間のすばらしさ、あきらめかけながら、がんばって滑ることができたスキー…

教室は消えてしまっても、6年間のできごとは、皆さんの記憶に記されています。喜びや悲しみは、心の中に刻まれています。

そう、皆さんが6年間につけてきた力は、津波で消えたりなどしてはいなかったのです。

皆さんは、本当に前向きなすばらしい最上級生でした。そればかりか、避難所で、後輩を世話するみんなの行動や、地域の手伝いをする姿に、今回の厳しい震災の中でも、大きく成長している皆さんを強く感じました。

今、皆さんが手にしている証書は、この小学校6年間の全てを修了したという世界に1枚の大切な証書です。この証書は一度は津波の底に沈み、汚れてしまいましたが、先生方で相談し、渡すことに決めました。

震災にあい、大きな苦しみや悲しみの中でも、仲間と助け合い、明るさを忘れず、未来を見つめようとがんばっている皆さんには、千年に一度の津波に耐え抜いた、この卒業証書が何よりもふさわしいと考えたからです。

これから、今まで以上に学び、たくさんの人と知り合い、自分の可能性に挑戦していくことになります。もしもつらいことがあったら、この卒業証書を見て、もう一度自分の力を思い出してください。

全世界の方々のご支援のおかげで、明るく元気な学校生活がおくれるようになったのです。

どんなときにも、自分を支え、励ましてくれる人がいるということを忘れず、その感謝の気持ちを自分の生き方の中に、生かして行ってください。

英語に「Pay it forward」という言葉があるそうです。お世話になった方に感謝を表すことと同時に、お世話になったことを、これから会う誰かに返していく大切さを示している言葉です。あなたがたの育った戸倉は、そんな温かい支え合いがあるすばらしいふるさとです。だからこそ、皆さんは、震災にも耐え抜く力が育っていたのです。

たとえ、どこに住んでも、皆さんの中に育った「戸倉の魂」はいつまでも心にあります。これから、みんなの力で大きく育て、すばらしいふるさとを作り出してください。

平成23年8月21日 南三陸町立戸倉小学校 校長 麻生川 敦



## 大震災から5か月

### －夏休みに入る前日(H23年7月29日)の全校集会での石巻市で震災にあった教諭の講話－

明日からいよいよ夏休みが始まりますが、昨年(H22年度)の夏、皆さんは何をして過ごしていましたか？必死で受験勉強していた人、部活動に夢中だった人、様々だと思います。(略)

私たちは今、日常生活を取り戻しつつあります。恐ろしかった記憶も少しずつ過去のものへとなり、また、笑顔が戻ってきました。しかし、その一方で、あの日あの時あの恐怖のまま、永遠に時間が止まってしまった人たちもたくさんいます。彼らと私たちと、一体何の違いがあるのでしょうか。あの夏にあれほど努力して、ようやく大好きな場所で働けると笑っていたあの子。彼女と皆さんの違いは、一体どこにあるのでしょうか。私は、違いなどどこにもない、と考えています。ただ単に、津波の押し寄せる場所に居たか、そうでないか、あるのはその差だけ。

私が避難所となった石巻商業で活動をしていた震災から2～3日後、受付の仕事をしていると、見なれた顔を列の中に見つけました。私の地元にいるはずの、父と母でした。石巻はかなりの道路が津波で冠水して通行止めになっていたのですが、震災後連絡のつかなくなった私を心配し、網の目をくぐって、ガソリンも必死で調達してくれてくれたそうです。張りつめていた気持ちが、父と母の顔を見て一気に緩みました。私は普段、忙しいからと、父や母からのメールへ返信せずにいることがありました。電話に着信があっても、かけ直さないでしまうこともありました。時間があいたら…と考えているうち、そのままになってしまうのです。皆さんも、そのような経験はありませんか？家族に八つ当たりしてしまったり、やらなければならないことに目をつぶって先送りにしてしまったり、大切な人の存在に慣れて、気持ちを伝えることを忘れてしまったり…。珍しくもない、よくしてしまうことですよね。しかし、皆さんに考えてもらいたいのは、「生きてると、時に理不尽なこともある」ということです。「努力は報われる」という言葉があります。確かにその通りであって、世の中には努力なくして達成できないことの方が圧倒的に多いです。しかし、「必ず」報われるわけではないのです。何が原因になるかは人によって差はあれ、私たちの必死の努力が、または大切な思い出が、何の前触れもなく、ぶつくりと途切れてしまうこともあるのです。その時、私たちは何を思うのでしょうか。私は、震災後、1日1日を「丁寧に」送るように心がけるようになりました。今、私の時間がぶつくりと途切れてしまっても、している何かが突然終わりを迎えてしまっても、「後悔」だけはしなくて良いように。

皆さんは、いかがですか？震災を経て「丁寧に」生きるようになったこと。これは、私が私の目で様々なものを見て、私の頭でたくさんのことを考えた結果たどり着いたことです。皆さんに押しつけるつもりはありません。ただ、皆さんにも様々なことを「考え・感じ」ながら生きてほしいのです。私たちが考えること、そして感じることをやめてしまったら、身の回りに物として存在している机やシャープペンと、一体何が違うのでしょうか。今回の震災を通して、皆さんはそのようなことを考えましたか？そして、皆さんにこれから起こるであろうたくさんのことに対して、何を考え、感じながら生きていくのでしょうか。これから始まる夏休み中も、たくさんのことを考え、感じながら過ごしてほしいと祈りつつ、話を終えたいと思います。

宮城県古川黎明高等学校 教諭 塩谷明日香



## 子どもたちの学びを支えた、通学支援！！

震災当時、本校には、気仙沼市と南三陸町からの児童生徒 83 名が在籍していた。午後 2 時 40 分の下校時刻にスクールバスが発車した直後の巨大地震であった。スクールバスは、幸いにもすべて学校に無事に戻ることができ、そのバスを校庭に入れ、バスの中で児童生徒は暖を取り、保護者の迎えを待つようにした。午後 6 時過ぎにはバスの燃料が少なくなり、校内の教室へ移動した。



その後、震災当日の欠席者を含めた児童生徒全員の安否確認ができたのは、震災から 6 日後で、児童生徒の引き渡しを終了したのは、7 日後のことであった。

その後、学校再開に至るまでの間、担任が家庭訪問を行うなどして児童生徒の心のケアなどに当たってきたが、児童生徒も保護者も、できるだけ早い学校再開を望んでいることがわかった。再開に向けての最大の課題は、道路状況の改善と通学手段であった。4 月 21 日からの学校再開に当っては、全家庭に送迎をお願いしてのスタートであった。しかし、スクールバスの運行が全コース開始されるまで、毎日の送迎が難しい家庭があるなど、前途は多難であった。

そうした中、生活支援センターから児童生徒の通学の支援ができるかもしれないという、願ってもない申し出をいただいた。

復興支援チーム（東京都社会福祉協議会知的障害部門・東京都発達障害支援協会合同プロジェクト復興支援チーム）による支援の一環として、通学支援に当たっていただけることとなった。この支援のおかげで、4 月下旬頃からは、10 名ほどの児童生徒が復興支援チームのワゴン車 2 台に分乗して片道約 2 時間をかけて通学するようになり、児童生徒全員が登校できるようになった。この支援で久しぶりに登校した児童生徒たちは、ワゴン車から降りるなり玄関の教師に駆け寄り、「おはようございます」と元気にあいさつをし、どの児童生徒もいきいきとした笑顔を見せていたのがとても印象的だった。

この支援チームによる通学支援は、スクールバス 4 コース全てが、全線運行となる夏休み前まで続き、延べ 200 名ほどのボランティアさんに携わっていただいた。ボランティアさんのほとんどが施設職員であったため、児童生徒とのレポートは直ぐに出来上がったようだった。実際に通学支援を利用した保護者の方からは、「一時は通学をあきらめたが、子どもが笑顔で毎日登下校する姿は、本当にうれしかった」という感謝の言葉なども寄せられた。

震災直後の混乱状況の中であって、児童生徒、保護者、学校にとって最もありがたかった支援であった。児童生徒の学びの機会を支えてくださった、復興支援チームを運営なされた東京の各施設の園長さん方をはじめ、携わっていただいたボランティアのみなさんに心から感謝いたします。

ありがとうございました。

宮城県立気仙沼支援学校  
校長 西脇 正彦

## 東日本大震災、その時、幼稚園は

### 卒園式の日

学校法人 六郷学園ドリーム幼稚園

その日は卒園式だった。卒園式が終了し、保護者による謝恩会がおこなわれていた時に地震が起こった。幸いな事にけがもなく全員が無事避難し、降園する事ができた。

その後、予想外の津波が迫り、指定避難所ではなかったが、職員は周囲の人々を園内に避難するよう誘導した。救助は夜通し行われ、職員も交代しながらできることを行った。それから4月13日までの間、園周辺の瓦礫撤去の他、園児の安否確認と近隣の避難所に園の情報を掲示、通園コースの確認、新学期準備など早期再開を目標に職員が協力し合った。そのためできる限りの環境を整え通常の2日程の遅れで新学期を迎える事ができた。今回は保護者同伴中の出来事だったが、通常保育であれば、もしかしたら園児らに被害が発生した可能性もある。普段からの訓練、備えがいかにか大切に改めて考えさせられた。



### 職員間・地域との連携

名取市立下増田幼稚園

園児を帰し、職員室でその日の保育について振り返りをしていた午後2時46分、激しい震れとともに、職員室にある棚や机から次々と書類がすごい勢いで落ちてきた。園舎内には幼稚園の職員のほか、放課後児童クラブの職員、さらに授業を終えた小学生が数名いた。みんなで助け合い、やっとの思いで園庭に避難した後、今度は寒さが容赦なく襲ってきた。幼稚園にあった体操用マットや毛布、布団などをかき集め、寒さで凍える子どもたちを囲うようにみんなで肩を寄せ合っていた。

その時、向かい側の小学校から「津波が来るから早くこっちに来い！」という叫び声が聞こえた。急いで子どもたちを連れて小学校3階へ避難した。小学校東側の道路から静かに水が流れてくるのが見えたかと思うと、あっという間に辺りは湖のようになり、駐車場にあった車の警報音が鳴り響いた。

その夜から、小学校職員や公民館の職員らと共に避難所の運営が始まった。「日本一の避難所を作ろう」を合言葉に、泊り込みで食料の配布や環境整備等を行った。

次の日の早朝からは、園児の安否確認を開始した。家庭訪問により園児の安否や家の状況などを把握するとともに、他の園児の避難場所等の情報収集を行った。津波による漂流物で辿り着けない家庭もあったが、園児やその家族の無事をひたすら信じ、家庭訪問を続けた。



園児の安否確認と避難所運営という厳しい状況が続いたが、幼稚園の職員だけでなく、児童クラブ、小学校、公民館との連携により、避難もその後のこともスムーズに行うことができたのだと考える。日頃から職員間や地域との連携について話し合い、体制を整えておくことの大切さを感じた。

## 日頃からの会話と現場確認

山元町立中浜小学校

3月11日、児童59名、教職員14名と地域の方を合わせ90名が校舎2階の屋上に逃れ、翌朝自衛隊のヘリコプターに発見され全員救助されました。

テレビによる大津波警報で予想到達時刻が10分後と報じているのを確認。二次避難所の坂元中学校へは低学年の子どもの足で20分以上かかることが避難訓練で確認済み。すぐに全員を屋上に上がらせました。津波は2階の天井まできました。無事だったのは幸運が重なったのかもしれませんが。屋上へ上がるという判断をした背景は、学校が津波の危険地帯にあるという危機意識を職員全員がもっていたからです。大津波警報の情報と時間がなければ屋上に逃げるという確認事項により、迷わず行動を決断しました。しかし、校舎に対する信頼がなければ判断を躊躇したかもしれません。校舎が丈夫なのは日頃の区長さんとの雑談から把握していました。それでも屋上への階段を上るときには、この階段を全員が生きて下りることを祈りました。

津波の避難は初動が大切です。避難のための貴重な時間を無駄にしないために、避難行動は極力シンプルにすべきです。当日の判断は、日頃の生活の会話、現場を直接見ておくことが背景となったと感じています。



## 力となった中学生

石巻市立大須中学校

午前中に卒業式を終え、生徒が帰宅していた午後2時46分、強烈な揺れがおさまった後、校舎の被害状況の確認中海を見たら、木材が激しく割れるような大きな音とともに、何軒かの家が津波で流されていく信じられない光景が見えました。

避難所の大須小学校には、本校の教職員や住民も合わせ、多いときで750名程の人が避難していました。学校と周辺を結ぶ道は全て断たれ、孤立状態となり、それがさらに住民の不安をかきたてました。小学校の校長とともに、校庭にSOSの文字を書いたことで、自衛隊のヘリコプターに発見され、支援を受け始めることとなり、その自衛隊が大須に到着したのは震災3日後。

避難所では、学校が中心となり、「地域のため、家族のため」を合い言葉に、生徒は、地域の方の水くみ、避難所の清掃や体操の指導などを行いました。夜は交代でトイレに起きるおじいさん、おばあさんの足下をライトで照らしました。不安な日々の中でも人のために働く中学生はたくましく美しいものです。日本の将来にほんの一筋の明るさを感じた瞬間でもありました。



## 東日本大震災、その時、高等学校は

### 避難と重要書類保持の両立

宮城県気仙沼向洋高等学校

東日本大震災当日は、年度内最後の授業日で、卒業生を除く全校生徒約 220 人のうち、170 人近くが学校に残り、補習やクラス行事、部活動などを行っていた。校舎外にいた生徒、教職員は、地震発生 5 分後には、避難指定場所となっている近所の寺に移動した。その後、より安全な場所への避難が必要と判断し、地震発生 30 分後には、そこから数百メートル先の階上駅に移動した。その時、津波が迫っているとの叫び声を聞き、地震発生 40 分後には、さらに数百メートル先の階上中学校に避難した。結果的に校内に残っていた生徒約 170 名と避難誘導した教職員 27 名全員は無事避難することができた。

校舎内では、地震発生 5 分後に校舎 1 階の事務室に約 20 名の教職員が自然に集まった。管理職からの指示で、校長室金庫に保管されていた指導要録と入試のデータ、事務室金庫内の重要書類、通帳、公印等を校舎 3 階に運んだ。地震発生 37 分後には、腰上くらいの高さの第 1 波が校舎を襲った。その後、第 2・第 3 波が校舎 4 階まで到達するが、マスターキーを持ってきた職員の機転により、普段鍵が掛かっている屋上に行くことができ、何とか難を逃れることができた。また、地震発生とともに 4 階を担当している職員が 4 階の全ての部屋の鍵を解錠していたことも大きな助けとなった。その晩は、建設中の新校舎 4 階で一晩を過ごし、翌朝明るくなるのを待って、使えるボートを捜し、校舎に残った教職員 46 名全員が脱出することができた。

生徒、教職員全員が安全に避難し、多くの重要書類を残すこともできたのは、校舎が海に近接し、普段から津波への危機意識が高かったため、教職員が打合せなしに生徒を避難させる者と書類等を運ぶ者に分かれて行動できたこと、生徒、教職員がそれぞれの立場で、マニュアルに従いつつ、それを超えて臨機応変に行動ができたことが要因である。



### 「生命を守る砦」となった保健室

宮城県石巻高等学校

震災当日は、雪が舞い、とても寒い日であった。海沿いの丘の上に立地する本校には、津波でずぶ濡れになったりけがをした方々が次々とやってきた。津波で全身が濡れた方々は寒さに震え、歯も合わせられない状況であった。あったけの衣類や毛布などを提供し、被災者の全身をさすって一晩を過ごした。

被災 2 日目には、津波や地震による精神的なショック、発熱などの症状への早急な対応が求められた。また、低体温や低血糖となり命が危険な避難者も生じ、近隣の医師に何度となく往診を求めた。多くの避難者の中には高齢者や慢性疾患を持っている方も多く、本校は医療拠点とならざるを得ない状況となった。被災 3 日目には、医師が看護師さんや薬剤師さんを連れて来校し、保健室での診察が始まった。被災 4 日目からは、病院をなくした医師、水没した石巻市立病院の医師・看護師が大勢集まり、保健室の隣の相談室で診療が始まった。診療所のスタッフは、震災で自分の病院がなくなってしまったにもかかわらず、寝食を忘れて被災者の診療にあたり続けた。本校の診療所ができてからは、避難所も診療所の医師・看護師・薬剤師がチームを組み、午前、午後の 2 回ずつ巡回し、簡単なカルテを準備することもできた。被災 7 日目には、全国の薬剤師会から支援の物資と薬剤師さんが多数派遣され、診療室の運営も軌道に乗り始め、この頃は、患者さんが一日 350 人を越える日もあった。日頃、児童生徒の安全を守り、安心を与える場所である保健室の機能は、震災により一変し、「生命を守る砦」として機能することとなった。

被災して帰る家のない卒業生や生徒のボランティアにより、受付業務、手作りの薬袋作り、問診時の記録補助などが行われ、診療室を支える大きな力となった。教職員は、毎日 5 回の打合せにより業務分担の明確化と情報共有を図り、避難所運営に当たった。日頃の良好な仲間作りが緊急時の信頼関係を支え、震災直後の危機的状況を乗り切る力となった。



## 子どもの笑顔を震災後初めてみた！

宮城県立光明支援学校

～震災後笑顔のなかった子どもが笑顔になったのはいつも通っている学校～

本校では、開校以来、PTAとの望ましい協力体制がしっかり根付いており、子どもたちのことや学校運営について常々連携を図っていました。このことが、震災後、表情の曇りがちだった子どもたちの笑顔の回復につながりました。

震災後、長期間の臨時休業を余儀なくされる中、PTA役員さんから「子どもが学校に行きたがっています。子どもたちのために是非学校の開放を」という依頼が寄せられ、学校とPTAが話し合いを重ねた結果、4月中旬の8日間学校開放を行い、小学部と中学部の子どもたちを受け入れることにしました。また、高等部の生徒についても、臨時の登校日を設け体育館での運動などを行い、ストレス解消を図ったりしました。

この学校開放を行ったことに対して、喜びと感謝の意を表す保護者の声がたくさん学校に寄せられました。また、同様に子どもたちの顔を見ることで、教職員の間にも安心感が生まれました。

○保護者の声 「子どもの笑顔を震災後初めてみた」

○職員の声 「学校に子どもが来ることで、学校の雰囲気  
明るくなった。子どもがいるから学校がある。  
学校があるから教員がいる。」



## 天国の友達へのメッセージ！

宮城県立石巻支援学校

～クラスの友達が津波で亡くなった。このメッセージ、天国に届け～

震災被害の大きかった沿岸部に位置する本校では、避難者を受け入れ、避難所の運営にも教職員が率先して取り組んできました。こうした状況の中、津波により犠牲になった生徒も何人かいました。2人の友達を亡くした高等部の学年では、彼らを忘れまいと話合った年度初めのホームルームで、新年度の学年の歌にゆずの「虹」が候補に挙がり、その歌詞（超えて、超えて、超えて、流した涙はいつしか一筋の光に変わる）に共感しこの歌に決定しました。さらに学年の旗を決める時、一人一人好きな色を出し合いました。その色を見た時「みんなの色を合わせると『虹』になるね」ということで、虹をメインにした旗に決定しました。

担任は「Aくんはあのいつもの優しい笑顔で、Bくんはあのくりくりとした大きな瞳で、天国からいつもみんなを見守っているよ。2人のためにも素晴らしい1年にしよう」という話をしました。

生徒たちは、亡くなった友達に思いを寄せながら、虹の学年旗を作成し、中心には天国の友達も一緒だよと、大きく「仲間」という文字を書きました。みんなでこの虹のメッセージが「天国の友達に届きますように」と祈りました。

